

機関番号：13901  
 研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2008～2010  
 課題番号：20520083  
 研究課題名（和文） 印章と刻印のメタファー：西洋中世におけるイメージと視覚性に関する研究  
 研究課題名（英文） Metaphor of seal and imprint: image and visuality in the Western Middle Ages  
 研究代表者  
 木俣 元一（KIMATA MOTOKAZU）  
 名古屋大学・大学院文学研究科・教授  
 研究者番号：00195348

研究成果の概要（和文）：13世紀後半にイギリスで制作された『グルベンキアン黙示録』の挿絵に描かれた、神が持つ印章のモチーフの意味を三位一体とヴェロニカとの関係から解き明かすした。また、ペトルス・ロンバルドゥスやライヒャースベルクのゲルホーなどのプレスコラ学者による詩編第4編7節の註解のテキストと関連させながら、聖顔が個々の信徒の内面に形成する聖顔のヴィジョンを印章とそれによってロウに生みだされる刻印というモデルにより理解する可能性を提案した。

研究成果の概要（英文）：We explained the motif of a big gold seal matrix hold by God in a miniature of the Gulbenkian Apocalypse illuminated in England in the second half of the 13th century with reference to the Trinity and the Veronica. And we proposed the possibility to understand the inner vision of the Saint Face formed in each believer according to the model of an imprint produced by a seal impression on wax tablet, based on the some exgetical texts on the Psalm 4:7 written by pre-scholastics such as Peter Lombard and Gerhoh of Reichersberg.

#### 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
総計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：西洋中世美術史

科研費の分科・細目：哲学・美学・美術史

キーワード：西洋中世、キリスト教、イメージ、印章、聖顔、刻印、美術、視覚性

#### 1. 研究開始当初の背景

(1) 美術史学や画像論の研究においては、この比喻は、ビザンティンのイコノクラスム期の画像擁護派（ストゥディオス修道院長テオドロス）が用いた原型と模像の関係を示す論拠として（Moshe Barasch, *Icon: Studies in the History of an Idea*, New York and London, 1992）、あるいは奇跡的に成立した根源的聖画像である聖顔布（マンディリオ

ン）との関係で（Herbert L. Kessler, “Configuring the Ininvisible by Copying the Holy Face,” in: *Spiritual Seeing: Picturing God's Invisibility in Medieval Art*, Philadelphia, 2000, pp. 64-8）論じられてきた。他方ゲルハルト・ヴォルフは、1200年前後、教皇インノケンティウス3世の下での西欧キリスト教世界におけるイコンの移入及びヴェロニカと贖宥といった画像礼拝の

理論的・実践的整備と関連づける(Gerhard Wolf, *Schleier und Spiegel: Traditionen des Christusbildes und die Bildkonzepte der Renaissance*, München, 2002)。

(2) 文学・歴史研究では、記憶や認識のモデルとしてのこの比喻の歴史をメアリー・カラザースがたどり(Mary Carruthers, *The Book of Memory. A Study of Memory in Medieval Culture*, Cambridge, 1990)、印章についてミッシェル・パストゥロー(Michel Pastoureaux, “Les Sceaux et la fonction sociale des images,” in: Jérôme Baschet, Jean-Claude Schmitt, eds., *L’Image: Fonctions et usages des images dans l’Occident médiéval*, Paris, 1996, pp. 275-308)のように記号論により新たな研究の方向性を提示したり、ブリジット・ブドス＝ルザック(Brigitte Bedos-Rezak, *Form and Order in Medieval France*, Aldershot, 1993; id., “Medieval Identity: A Sign and a Concept,” *The American Historical Review*, 105 (2000), pp. 1489-1533)のように、印章がこれまでにない機能を獲得した社会的状況やアイデンティティの新たな概念形成を対象に研究を実施してきている。

(3) 研究代表者は、平成17-19年度科学研究費(萌芽研究)による研究である「西洋中世におけるイメージの複製と権力」において、無限に同一の形態(オリジナルなきコピー、あるいはコピーなきオリジナル=ゲイリー・ヴァイカン)を反復して産出する、硬貨の打刻などの「機械的複製手段」(ヴァルター・ベンヤミン)と、その専有が権力や権威と結びつく状況について考察を進めた。その過程で、印章とその刻印というメタファーが西洋の認識論の伝統において重要な役割を果たしており、し、とりわけ西欧盛期中世においては、広範な印章使用を機能させた特殊な社会や文化の状況の下、単なるコピーや反映としてのイメージ概念とはまったく異なる「視」のあり方を実感させるモデルとして有効であり、歴史的再構成に値するという着想に至った。

(4) このメタファーに関する考察を進展させ、西洋中世における「視覚性(visuality)」(cf. Robert S. Nelson, ed., *Visuality Before and Beyond the Renaissance. Seeing as Others Saw*, Cambridge, 2000)の問題として、実際の印章や刻印をめぐる諸問題や印章の図像学的考察、美術における印章と関連する表現、ウェロニカやマンディリオンなどの「アケイロポイエトス(人間の手によって作られていないイメージ)」における痕跡=刻印(imprint)の議論と関連させながら、本来不可視の存在である神を直接見る経験としての視のあり方へと考察を展開していく。

## 2. 研究の目的

本研究は、印章(seal)の母型(matrix)とその刻印(imprint)という比喻を通じて、西洋中世における「視覚性(visuality)」、すなわち社会的・歴史的・文化的に形成された多様な「視」のあり方について考察しようとするものである。

この比喻は、プラトン、アリストテレスなど古代ギリシア認識論で幅広く用いられ、キリスト教の教父では三位一体、創造主と人間、神と人間の魂との関係を説明するモデルとして受け継がれ、ビザンティンでは聖像破壊論争期の画像擁護派の神学者により用いられた。11-12世紀の西欧では、従来は君主に使用が限られた印章を、王侯貴族に加え、聖職者、修道院長、職人や商人、農民に至る幅広い社会階層で使用するようになり、判型や図像も大きく変化する。“imago”の第一義たる印章が活発に機能する社会的・文化的基盤の変化に対応し、この時期の神学的テキストに印章と刻印にまつわる比喻が頻出し、伝統的トポスの継承という契機だけでは説明できない、イメージ、視覚、認識、記憶、存在、記号などをめぐる興味深い議論を展開する。本研究では、これらの神学テキストのみならず、印章をとりまく実践や図像に関する総合的な考察を通じ、西洋中世盛期(12-13世紀)の視覚性の一様相を明らかにすることをめざす。

本研究では、主として以下のような3つの問題について解明することをめざす。

(1) 古代ギリシアから聖書、初期キリスト教、ビザンティン、さらに西欧の初期中世を経て、11-13世紀の前スコラ学とスコラ学の著述を中心に、印章とその刻印をめぐる比喻が登場するテキストを可能な限り収集し、各テキストをそれぞれに固有のコンテキストのなかに位置づける。こうした考察により、中世盛期においてこのメタファーがそなえる、以前には見られない独自性や新たな特質を明らかにするとともに、そうした特質が生み出された歴史的・社会的・文化的背景についても明らかにする。

(2) 11世紀から12世紀にかけて西欧において大きく変質し、従来になく発展した印章について、その使用様態、多様なタイプ、判型、図像学的特質、刻印が施されるロウという可塑的素材がそなえる役割や象徴的解釈など、この時代に印章と刻印に関わるメタファーが比喻として機能するに至った社会的・文化的条件を、古代や初期中世における印章をめぐる文化との比較などをつうじて明らかにするとともに、この比喻の内実を詳細に記述する。上記(1)で考察対象としたテキストとの照合を行い、このメタファーが、西洋盛期中世特有のイメージ概念や視覚性を説明するための有効なモデルでありことを

明らかにする。

(3) 11-13 世紀の美術作品における神やキリストの描写を中心に、印章が描写されている例(『グルベンキアン黙示録』)や、刻印されたイメージとの関連性を想定できる作例に関し考察する。また、とりわけ本来不可視の存在である神を肉眼による視覚で感覚的にとらえるのではなく、あたかもロウに刻印がなされるかのように、直接心にイメージが刻み込まれる認識及び記憶のあり方、さらにそれが形成された状況について考察を行い、神学的な思弁とイメージの制作およびイメージの受容との関連性について明らかにする。こうして美術作品を媒介とした、直接「顔と顔を合わせて」神を視る神秘的経験の様態に関する理解を深める。

### 3. 研究の方法

印章の母型とその刻印という比喻を通じて、西洋中世における「視覚性」、すなわち社会的・歴史的・文化的に形成された多様な「視」のあり方について考察するという目的を達成するため、必要となる方策は主として以下のような4点にまとめられる。

以下、それぞれの具体的な研究手法を項目別に記述する。

#### (1) 印章を刻印をめぐる比喻が現れるテキストに関する調査と考察

11-13 世紀の前スコラ学とスコラ学の著述を中心に、印章とその刻印をめぐる比喻が登場するテキストを可能な限り収集し、各テキストをそれぞれに固有のコンテキストのなかに位置づける。

具体的には、ブリジット・ブドス＝ルザックらの先行研究を踏まえつつ、J. -P. Migne, ed., *Patrologiae cursus completus, Series Latina*, 221 vols., Paris, 1844-1890. の CD-Rom 版(本学の近接する南山大学図書館において調査)により、「印章」と「刻印」を意味する主な語彙(imago, representatio, impressum, forma, character, figura, effigies, similitudo, simulacrum)を検索し、その結果に基づいたリストを作成する。語義の時代による変遷や著者の属する学派との関連性について考察し、さらに本研究の関心と合致する事例を抽出し、その内容やコンテキストを明らかにするとともに、関連する語義(イメージ、表象、形象、肖像、類似など)との関連性についても併せて考察する。

#### (2) 印章の使用を成立させる社会的・文化的条件に関する考察

最新の印章研究を参照し問題点を整理する。また、フランスを中心に国立公文書館(Archives Nationales, Paris)に所蔵される印章の現地調査によって実物に関する理解を深め、11-13 世紀の西欧において大きく変質し、使用範囲が大幅に拡張した印章につい

て、その所有者、使用様態、タイプ、フォーマット、図像学的特質、ロウという素材が担う役割や象徴的解釈など、この時代に印章と刻印に関わるメタファーが機能するに至った社会的・文化的条件を考慮することで、この比喻によって示される内容を明らかにする。上記(1)で考察したテキスト/コンテキストとの照合を行い、この比喻のどのような特質が、西洋盛期中世特有のイメージ概念や視覚性を説明するためのモデルとして有効であるのかについて明らかにする。

#### (3) 神・キリストのイメージと印章の比喻の関連性に関する考察

11-13 世紀の美術作品における神とキリストの描写を中心に、印章が描写されている例(『グルベンキアン黙示録』挿絵など)や、印章の図像との関連性を想定できる作例の収集を実施するとともにこれらに関して考察する。

個別的な観点としては、本来不可視の存在である神に対し直接心にイメージが刻み込まれる認識及び記憶のあり方、神学的思想と美術との関連性、印章と同様に刻印という機械的複製手段が根拠をなす奇跡的イメージ(マンディリオンやウェロニカ)と西欧の関係、人間の魂が直接「顔と顔を合わせて」神を視る神秘的経験(beatific vision)に関する思想、硬貨などの刻印という機械的複製手段などがある。

#### (4) 西洋中世の視覚性に関する考察

以上のような考察の成果を踏まえて、西洋の盛期中世における視のあり方について理解するための1つのモデルとして印章と刻印というメタファーに関する解釈を提示する。さらに、今後実施する予定の研究において、聖遺物とイコン、聖堂装飾の理論、イメージとテキスト、記憶とイメージ、隠蔽と顕現(光輝と闇黒、雲とヴェール)などといった論点と併せて、盛期中世における「視覚性」を総合的に考察する包括的な研究へと発展させていくためのひとつの基盤となる成果としてまとめる。

### 4. 研究成果

(1) 具体的な作例として 13 世紀半ばにイギリスで制作されたヨハネ黙示録写本『グルベンキアン黙示録』(リスボン、グルベンキアン美術館所蔵 MS L. A. 139)に含まれる挿絵に見られる印章のモチーフに関する考察を行い、日仏美術学会例会で発表するとともに研究論文として刊行した。印章のメタファーとの関連から、三位一体の父と子および神とその僕である信徒の関係、キリストの受肉と受難の証拠、終末における神との「顔と顔を合わせての」出会いの約束と結びつく要素としての新たな解釈を提示した。

挿絵左上部の神が手にする印章を子=キ

リストとの関係でとらえるなら、その印章は、かつてキリストが地上にいた時に布地に刻印され、その痕跡がウェロニカとして残されていることになる。したがって、神と印章、そしてウェロニカとそれに手で触れる皇帝は、天上と地上というレベルの異なる空間を階層構造的に接続すると同時に、キリストの受肉、受難、昇天、再臨という通時的なパースペクティブを開くものでもある。この挿絵の素材としての布地と形相として聖顔を切り離す独特なウェロニカの描写は、かつてのキリストの受肉における人性と神性の関係を示唆し、ウェロニカという奇跡的イメージにおける物質と形相の関係を説明することでイメージを媒介とした神の礼拝に関する理論を提示し、さらに最後の審判における神との直接的な対面を保証する。そして、人間の魂への神の刻印がアダムの創造まで遡及できるとすると、天地創造から最後の審判に至る壮大な時間の広がりや、印章とウェロニカは喚起するのではないだろうか。

(2) ウェロニカなどの聖顔が媒介物（メディア）として多様な機能を果たしていたことに注目し、そうした機能と西洋中世社会で印章がになっていたメディアとしての機能とを関係づけた考察を行い、印章がロウに残す痕跡と聖顔が信徒の内面に形成するヴィジョンとの関係に言及して西洋中世学会大会で発表を行うとともに、研究論文として刊行した。

13世紀イギリスのウェロニカ・イメージは、詩篇を中心に個人的祈念で使用された写本に挿入され、インノケンティウス3世の起草と伝わる祈禱文が添えられた。こうしたウェロニカは、サン・ピエトロというラテン教会の中心をなすパブリックな空間で実践される聖顔の礼拝と、イギリスという周縁的地域における個人的祈念とを媒介する。祈禱文は画像とともにこうした祈念を構造化し、神の顔を激しく希求するコンテクストを形成する。ウェロニカは、こうした願望に応えつつも、祈禱文は、これ「鏡におぼろに映ったもの」にほかならず、神との「顔と顔を合わせての対面」が、時の終わりでのみ許されることが確認し、新たな乗り越えがたい距離を設定する。

(3) 三位一体における父と子の相同性を印章と刻印のメタファーで説明するプレ・スコラ学のテキストに着目し、13世紀イギリス写本に多数見られる詩編 109(110)編冒頭のイニシャル D に関して図像学的考察を行い、父なる神の顔が不可視の状態で提示される作例を取り上げ、その成果を新約聖書図像研究会で発表した。

(4) 聖顔と向かい合う信徒が形成する内的認識において神との「顔と顔を合わせて」の出会いがどのような内的ヴィジョンの質

と関わるかという問題を、ライヒャスベルクのゲルホーのテキストとの関係で考察し、「イメージとヴィジョン」と題されたシンポジウムのパネラーとして発表した。

11世紀から13世紀初頭にかけてのプレスコラ学者およびスコラ学者のテキストにおいて、印章とその刻印や痕跡というメタファーは、印章を保持しそれを刻印する特権的存在としての神、父なる神と印章としての子＝キリストの関係、唯一の起源である神とそこから派生し世界に広がる神の僕との関係、自らの魂に刻印された神の痕跡をよりどころとしてその起源へと遡っていく人間の魂、神と神の僕である人々とを媒介するキリストという印章などの多様な主題を説明するモデルとして幅広く登場する。このモデルが幅広く用いられたのは、人間の魂に形成される神のヴィジョン＝イメージに実際に用いられた刻印がそなえる存在感、手触り、物質性を与えるばかりでなく、人間の魂が本来そなえる本質として、その起源としての神という印章あるいは印章を押す存在に向かって遡及することに実感を与えるからと思われる。この点で、これらのテキストのうちペトルス・ロンバルドゥスによる、『詩篇』4編7節に関する以下のような註解が参考になる。「あなたの御顔の光、すなわちあなたの恩寵の光、それによってあなたのイメージが私たちのうちに取り戻され、そのイメージによって私たちはあなたに似る。その光は私たちのうえに刻印され、それは、それによって私たちが神と似ている、私たちの理性という魂の優れた力に刻まれる。その光は、印章がロウに刻印されるように、私たちの理性に刻印される。」この部分では、神の御顔の光であるキリストという印章を通じ、本来は神に似せて創造され、神のしるしが刻み込まれた人間の魂が、アダムとエヴァが犯した原罪以後失っていた神のヴィジョンを取り戻し、本来の形を回復することを、印章と刻印というモデルで説明する。さらに推論を一步進めるなら、このようなメタファーやモデルは、対面する神の顔を描くイメージが観者の内面に喚起する認識や経験としてのヴィジョンのあり方とも無関係ではない。聖顔は、そこに痕跡を残したキリストによる接触の身ぶりへと、さらにはキリストの受肉、そして神による人間の創造へと時空を遡り、あたかも柔らかいロウに印章が押しつけられるように、見る者の魂にある種の型を刻印するようなヴィジョンをもたらす。イメージの近代的概念が、もっぱら視覚に関わり、対象との距離を前提とするのに対し、聖顔が喚起したヴィジョンは、時間的・空間的距離が無化され、神の顔が信徒の魂の顔に刻印される経験として受けとめられ、まさに「顔と顔を合わせて」、母型（マトリックス）とそれにより形づくら

れる対象とが相互にコンタクトし一体となった可能性を示唆したい。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

- (1) 木俣元一、メディアとしての「聖顔」、西洋中世研究、査読有、2、2010、21-35
- (2) 木俣元一、ウェロニカと印章：『グルベンキアン黙示録』の一挿絵をめぐって、美学美術史研究論集、査読無、24、2010、59-92
- (3) 木俣元一、西洋中世における「スポリア」、西洋美術研究、査読無、15、2009、154-168
- (4) 木俣元一、イェルサレム・コンスタンティノポリス・パリ：サント＝シャペルとその装飾、西洋美術研究、査読有、14、2008、33-53.

〔学会発表〕(計4件)

- (1) 木俣元一、顔と顔とを合わせて：聖顔・痕跡・ヴィジョン、イメージとヴィジョン 東西比較の試み、2011年2月13日、東京大学
- (2) 木俣元一、13世紀イギリス写本における「三位一体」図像：『詩編』第109編のイニシアル装飾を中心に、2010年12月23日、立教大学
- (3) 木俣元一、メディアとしての「聖顔」、西洋中世学会大会、2010年6月27日、名古屋大学
- (4) 木俣元一、ウェロニカと印章：『グルベンキアン黙示録』(リスボン、グルベンキアン美術館 MS L.A.139)の一挿絵(fol. 13r)をめぐって、日仏美術学会例会、2010年3月20日、東京日仏会館

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

木俣 元一 (KIMATA MOTOKAZU)  
名古屋大学・大学院文学研究科・教授  
研究者番号：00195348

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし